

特集2

月食観望会と「宇宙への興味の第一歩」

松井瀬奈（名古屋大学）

1. はじめに

2022年11月8日、日本全国で楽しむことのできる条件の良い皆既月食が起きた。当時大学院修士課程2年であった私は月食当日、名古屋大学構内からオンラインで研究会に参加していた。「機材はあるから、月食見に行こうよ。」と、隣の研究室に所属する天文マニアに誘われたものの、部分月食の開始直前まで身動きが取れず遠出ができないこの状況。ならばいっそ大学構内で観望会を実施して皆で天文現象を楽しもう！と、イベントの企画を決断した。本稿では実現までの道のりに加え、天文・宇宙をより多くの人に広めるための自身の活動について紹介する。

2. 天文学者は星を観ない

今この文章を読んでいる方はよく知った話であろうが、天文学や宇宙物理学をやっているからといって毎晩のように星を眺めているわけではない。それは「宇宙物理学者のたまご」であっても同じことである。特に私が所属する研究室は「銀河進化学研究室」といい、天文・宇宙物理学の中でも理論グループに区別される研究室である。例えば、同研究室や隣の研究室（同じく理論系）に所属する学生たちと夕方ごろに学内を歩いている際、私が「あっ金星！綺麗！」なんて言っても「どれ？」と返ってくるのがほとんどである。月食観望会は数少ない天文マニア仲間と企画することになった。しかし言うまでもないが、興味を持つ学生は少なかった。まず自身の所属研究室のメンバーから月食観望会の参加希望者をアンケート形式で募ったところ、私を除く10人中4人が興味を持ってくれた。しかしほぼ全員から「外は寒いし、研究が忙しいから

少しだけ望遠鏡を覗かせてもらって、その後すぐに研究室に戻りたい。」といった旨の連絡があった。

3. 興味の第一歩

皆既月食は都会からも観ることができ、かつ、時間変化を気軽に楽しむことができる天体ショーである。少しでも観望会に参加したいと言ってもらえたことは幸いであったが、私としてはなるべく多くのメンバーにできるだけ長い時間に渡って、月食ならではの変化を楽しんでもらいたい。このような宇宙に興味がないわけではないが、天文現象にはそこまで興味のない人々を引き込むためにどうしたらいいのか。いわゆる「興味の第一歩」をどこに持ってくるか。これが本観望会を開催するための鍵となった。

4. 月食パーティー

結果、本研究室のメンバーは普段から集まって夕食に行くことが多いことをヒントに、月食観望会を、飲食を伴う「月食パーティー」に変更した。ただし、新型コロナウイルス感染拡大によるパンデミック禍であることからパーティーは完全に閉じられた会とし、参加者は2研究室のメンバーに限定した。観望用の機材には、マニアによる持ち込みの望遠鏡2台、カメラ3台を使用した。加えて事前にある程度の人数を調査し、花見用のブルーシートと飲食物を準備した。また、誕生日に近いメンバーがいたため、サプライズの準備も行なった。「観望会」にそこまで興味がなかったメンバーも、いつの間にか「パーティー」の準備を積極的に手伝ってくれていた。天王星食を全員で楽しめたかったこともあり、望

遠鏡1台は赤道儀とカメラを用いてモニタリング可能な状態とした。さらにもう1台は経緯台式であったため、誰でも操作がしやすい利点を活かし、月に向けるタイミングはもちろん他の惑星や二重星などの観望も行なった。

5. 結果

前述の通り、事前のアンケート結果によると参加者は数人程度かつマニア以外は全員すぐに帰りがっていた。しかし結果的には本研究室と隣の研究室合わせて15名ほどのメンバーの参加があった。さらに驚くべきことに、ほとんどのメンバーは月の欠け始めから終わりまで参加していた(図1)。最初は寒いと言っていたメンバーも、天王星食の際には食い入るように望遠鏡を覗いていた。ちなみに今回の参加者は全員、宇宙を専攻する大学院生や学部生、若手研究者であったが、「月食を生まれて初めて見た」という人も多かった。本イベントを通し、宇宙物理学を志す若手の中でも興味の入り口は人によって様々であることを再認識させられた。



図1 月食パーティーの様子

6. その後の天文教育普及活動

私は普段から研究の傍らアウトリーチ活動を行っており、月食パーティーの後にもいくつかイベントの仕事を引き受けている。その中の1つに、私の地元である愛知県豊橋市

にある、「こども未来館ここにこ」での企画展への宇宙関連のポスター出展の依頼があった。私は近年「学生だからこそできるアウトリーチとは何か」に重きを置いた活動をしており、今回の月食パーティーもその一環である。私は天文教育普及の中でも特にプラネタリウム施設における教育普及に興味があり、全国のプラネタリウム館に足しげく通っている。その個性を活かし「愛知県はプラネタリウム県!？」と題して全国的に見てもプラネタリウム館の数が多い愛知県のプラネタリウムを館ごとに紹介するポスターを制作した。それぞれの館の特徴や注目ポイントに加え、投影スケジュールをまとめたポスターをプラネタリウムの無い施設に掲示するという、おそらく全国的に見ても珍しい事例となった。この展示は、月食パーティーで培った「参加者に結果的に宇宙や天文を楽しんでもらえたら、興味の入り口は必ずしも星や宇宙でなくとも、パーティーでもなんでもいい」という経験に後押しされて実現した。

7. おわりに

学生はアウトリーチ活動において、専門性では大学教員に劣り、教育の質では科学館職員に劣ってしまう存在と言える。しかしどの立場よりも参加者に寄り添いやすく、フレキシブルに動きやすいなどといった良い側面も持っているとは私は考える。これらの学生ならではの強みを活かし、「興味への入り口を広げる活動」を今後も行なっていきたい。



松井 瀬奈